

を獲得することが起こるか、それに執着する（取）からだ。執着するのは、愛欲（愛）があるからだ。何かに執着し愛欲を感じるのは、それを感受する（受）からである。何かを感受するには、それに触れなければならぬ（触）。触れるのは、眼耳鼻舌身意という五つの感覚器官とそれをまとめる意識、つまり外部の刺激を受け入れる六つの器官（六、入）が人間の体にそなわっているからだ。それがそなわるとは、どういうことかとというと、人間に言葉を使うという性質と身体性というものを持つという性格（名色）があるからだ。そういう性格を持つのはその元になるような何かある種の心の働き（識）があるからだ。心の働きが生まれるのは、心を作り出す行為・カルマ（行）があるからだ。行が生まれてくるのはなぜかかというと、そもそも一切の存在は無我だということに対する愚かさ（無明）があるからだ、と。このように老死の苦しみの原因を掘り下げていくのだが、それが十二項目からなっているので「十二縁起」ないし「十二支縁起」という。

現代の研究によれば、釈尊自身が最初から体系的に語ったのではなく、以後に整理され十二のかたちにとめられていったようだ。しかしそれはともかく、これは以後の仏教の考え方の基本になっており、唯識ももちろんそれをベースにしている。

まず無明という煩惱がある。そうすると、その無明が働くというカルマがある。カルマによって命の働きが起こる。そうすると、また煩惱が起こる。煩惱によってまた存在しようという行為が起こる。そうすると実際の命が起こってくる。

こういうふうに、人間の生きている根底に存在の無我性がわかっていないという意味での煩惱がある。そういう意味で汚染されている。そのことによって無明が働き始める。そこで汚染された行為が起こってくる。そうすると、そこに非常に原初的な、例えば胎児の心の働きが起こってくる。つまりそこで生命が

始まる。生命が始まると、その生命がただちにそれに愛着・執着するという煩惱の働きになり、それが存在しようという行為になり、そして生きようとして実際に生きはじめた時、生まれる時にも苦しみがあり、老いていく苦しみがあり、そして死ぬという苦しみもある、といったかたちで、ふたたびこの生が汚染されていくのだという。

このように仏教は、煩惱の汚染と、行為（カルマ）の汚染と、そして生の汚染というふうに、私たちの命の根本は全面的に汚染されてしまっていると洞察する。そして、煩惱が不浄であること、行為（カルマ）が不浄であること、生命が不浄であることは、現に起こっている事実だと見ている。そして、現にある事実に対して、それはなぜかを説明するには、アーラヤ識という概念を立てなければならぬという。それが、まずアーラヤ識の存在証明の最初の三つである。

① 煩惱の不浄さ

生きていると心の表面にいろいろな煩惱が起こる。過剰な愛着、怒り、嫉み、不安、高ぶり、落ち込みなど様々な煩惱が起こっている。「煩惱」という仏教用語がびんとこなければ、「悩み」といっても「トラブル」といっても「問題」といってもいいが、どう呼ぶにしても、そういう言葉で表現されるような現象は私たちの生活の中にありありと存在している事実である。

煩惱が心の中に起こり、消える。例えば腹が立つ、しばらくして腹立ちがおさまる、ところが、翌日思い出してまた腹が立つてくる、ということがある。腹が立つようなことがあったのはきのうのことで、きょうは何もないのだが、思い出すと、腹が立つという煩惱がまた起こる。消えたはずのものがまた起こってくるのはなぜか。六識からは消えても、どこかに保存されていなければ再生することはありえない。

煩惱が保存される場所を想定しなければ、この事実が説明できないというのである。

さらに、私たちはいつも煩惱の心だけを起こしているわけではなく、忘れていた時も、もう少し優しい気持ち、すがすがしい気持ちになっている時もないことはない。あるいは坐禅などしていると、そういうものがまったくないという心境にもなる。そこでは煩惱は消えている。ところが、坐禅が終わってほんの五分後でも、思いどおりにいかないことが起こると腹が立ったりする。

要するに煩惱の働きは確かに断続的で、時に善の心や煩惱を治療するようなすがすがしい心の働きが起こることもあるが、やはりまた煩惱が湧き起こってくる。それはなぜかというところ、やはり六識以外のところに保存されているからだと考えられない。そういう煩惱（特に無明や愛、取の心）の保存されているところを「蔵IIアーラヤ識」と呼び、「それゆえにアーラヤ識がなければ煩惱の汚染は成り立ちえないのである」(六〇頁)という。

②業・カルマの不浄さ

次はカルマ・行為の汚染だが、これも十二縁起を前提とした証明である。十二縁起を前提にすれば、各項目のつながりも前提になる。すると六入つまり六つの感覚器官があり、その前に一種の言語性と身体性を生み出す元（名色）があるとされている以上、それは六識とは違う識でなければならない。六識と違う識があって、それが六つの感覚器官やさらに感受や愛着を生み出すから、そこで行為の汚染が起こると説明しなければならぬというのである。

これは十二縁起を前提にしていけない私たちには、そのまま証明にはなりにくい。しかし、私たちの体験からしても、執着や愛着はなく、ただひたすらに感じているだけという心の状態があるし、感じていると

いうのも定かでないぐらい、ただ光が目に入る、音が耳に入るといふ状態もあり、それを五感と意識が受け止めるということがある。そういうことの成り立っていると、私たちの心身性―心と体の働きがあつて、それがこういう問題性を生み出すこと、しかもそれが意識されていないということも確かにあるように見える。

例えば目で物を見ることを考えても、目が見る器官だということ、目がそういう性質を持つことそのものは、自分で決めることはできない。目では見ることしかできない。聞くことはできない。耳では聞くことしかできない。そういうことがあらかじめ決まつている。そういう意志ではどうにもならない心身性を与えられていて、それが維持されている世界がある。そういう維持されているものが、私たちが問題行動を起こす元になつてゐる。それは確かに言える。人間として生まれてしまうと、自分で選んだわけでもないのに眼耳鼻舌身意を持つており、さらにその底に、そういう心が欲しいと思つたわけでもないのに、愛着し執着していく心もあらかじめ与えられている。

やることなすこと・カルマがいろいろのトラブルをもたらししているといふのは私たちの生きてゐる実感で、「執着や愛着を生み出すような、意識ではどうにもならない心の奥底の世界がある」と仮定すると、その現実がよく説明できる。体も心もなければ、トラブルは起こりようがなく、私たちが体や心を持って生まれてくると、必ず何が好きだ、何が嫌いだ、何を欲しがるといったことがすぐに起こる。それは、意識を超えたところに意識をそうさせてしまふ働きがあるからで、それを唯識派の人々は「アーラヤ識」と呼んだのだと理解すると、この証明もかなり納得できる。

③生の不浄さ

三番目の「生の不浄さ」は、ある意味ではさらにわかりにくい。

仏教では輪廻が前提になっている。だから、一つの生で死ねばすべて終わりなのではない。ある生と次の生との間に中間点があり、そこを経て次の生に輪廻していくと考えられている。まず生きている存在は「生有」がある。死も一種の存在だと考え、「死有」という。そして、次の生に移るまでに「中有」あるいは「中陰」という段階がある(余談だが、この「中有・中陰」の状態は最短七日間から最長七七・四十九日間続くことになっていて、だから日本の仏教では、七日ごとにいろいろな儀式を行なう。中有の状態から次の行き先がはつきりするまでの間に、できたらもう少しいいところに生まれ変わるように援助しようというのが、四十九日をやりお経をあげることの意味なのだ)。

そして、生有から死有を経て中有の段階になると、その段階では意識がなくなっている。にもかかわらず輪廻するのは、意識ではないが次の生を得たいと思う密かな心の働き・識があるからだという。

これは仏教的な世界観から言えることだが、現代の科学的な世界観から見ても、それなりに納得できる。つまり、私たちは誰でもまったく意識の働いていない段階から命を受けてきた。記憶を遡っても、私たちが生まれてくるに際して意識のない段階が確かにあった。意識はないが生きているという段階があった。そこに何かやはり生きようとする別の働きがあると想定しなければ、生命が生まれてくることがうまく説明できない。これを、科学的な用語で「遺伝子情報」と言い換えてしまえば、現代人にも納得できるだろう。遺伝子情報がある一つの生命を作り出そうとするプログラムを持っている。そのプログラムが発動するようなきっかけ・刺激を与えてやると、それが発動して生命になっていく。

《アーラヤ識》ではなく「生命情報」という言葉のほうが納得しやすければ、そう言い換えてみよう。生命情報は意識ではない。生命情報それ自体を私たちはまったく意識していない、できない。にもかかわらず、それがあからこそ、身体や意識が生まれてくる。生まれてくるだけではなくて、その生まれてきた生命が、様々な悩みを持ったり、痛みを感じたり、トラブルを起こしたりするのも事実だ。

そうすると、遺伝子情報がなければ、問題はなかったことになる。人間としての遺伝子情報がなければ、人間が戦争をすることも起こらなかったわけだ。これはもちろん途中プロセスを省略して言っているのだが、こうした科学主義的な概念で言えなきゃダメで納得いくと思うが、いかがだろうか。人間が憎しみ合ったり殺し合ったりということを様々にやってきた、また現にやっているのは事実である。これは生命があるからだ。この生命は遺伝子情報がなければない。

すると、やはりある種の心を生み出すような、意識の前提になり、意識を生み出し、五官を生み出し、身体を生み出す元になるある種の心の働きあるいは情報の働きのようなものを想定しないかぎりには、私たちが生まれてくることの説明と、生まれてきたことよって、生きている中で様々なトラブルが起こっていることの説明のしようがない。

アーラヤ識の二つの側面

唯識についての洞察はここまでのところ、人生の否定的な側面について、それがどこから生まれてきたかということだけを見ているので、読者にはとても暗い世界観と感じられるかもしれない。確かにアサンガも、まず人間の煩惱の暗さ、汚さと、煩惱による行為（カルマ）の暗さ、重さ、すさまじさ、そこから生まれてくること、生きることそのものにある苦しみや醜さをたじろぐことなく見つめるところから始め

ている。けれども重要なことは、それで終わりではなく、「にもかかわらず、人間は覚れる」と言っていることだ。確かに人間は、煩惱とカルマと命そのものの汚染を抱えており、汚れたアーラヤ識を抱えて生まれてきているからこそ、生まれてくると、苦があり、不安があり、煩惱があるのだが、同時に「そういうアーラヤ識を抱えているからこそ、人間は覚れるのだ」と言う。きわめて重要なので繰り返し言うが、それが「撰大乘論」の基本的なメッセージなのである。

④世間の清浄さ

アーラヤ識は、人間の様々な汚染を生み出す根本のものとして、人間に逃れがたく与えられてしまっている。それは意識で少しくらい何かしてもどうにもなる代物ではない。にもかかわらず、人間にはやはり清らかな側面、肯定的な側面がある。まず、平均的・平凡なこの世のレベルでの清らかさが成り立つのも、アーラヤ識があるからである。例えば、私たちは人間の醜い姿を見たときに、なんとかそういう状態から離れたい、超えたい、変えたいといった気持ちを持つことも確かにある。そうでない生き方をしたいと思ったり、ある程度は実際にすることができる。例えば、善意・いい心を起こして、それを実行する。ところが、やっているうちに、そのことが忘れられ、飽きてくる、めんどくさくなる、やめる、それからまたふたたび煩惱が起ころんといったことももちろんある。善なる心は、やはり起こったり消えたりするのである。

それから、例えば、もう一歩進んで、いちばん根本的な問題は無明であり、無明を超えるには心を澄み切らせなければならぬ、澄みきった心にするには、例えば坐禅をしなければいけないといったことを学ぶと、たまには坐禅しようかなという意欲が起こったりもする。足が痛いからやめよう、きょうは疲れた

からよそう、という煩惱が起こることのほうが多いが。いや、やはり今夜はちょっとやろう、たまには唯識心理学のワークショップに行こうという気になることもある。

そういう気持ちが起こったからといって、自分が煩惱でいっぱい平均的・世間的な人間であることは本質的には何も変わってない。だが、善の心が起こることもある。そして、起こって消える。それは、どこから起こってどこへ消えるのか。それについても、やはり六識以外の世界、《アーラヤ識》を立てないと説明がつかないのである。

私たちは思想状況としてフロイド以後にいたので、「無意識」という言葉を聞いても、なんとなくあるような気がする。だから、「善なる心や悪なる心が起こったり消えたりする元になっている無意識の心の世界がある」と言われると、なるほど、あるかもしれないと思うだろう。やや単純化したフロイド的な見方で見ると、人間の心のいちばん奥底には、性への激しい欲望や攻撃性が潜んでいて、それらを辛うじて社会的に容認されるかたちにある程度変化させる・昇華することはできるけれども、人間の心の奥底にあるものは基本的にはやはりおそろしく否定的で醜いものである……と。アーラヤ識の概念も、ここまでならば、やや平板に理解されたフロイド的な無意識とそれほど違わない。

⑤ 出世間の清浄さ

しかし唯識の大事な点は、次の「出世間の清浄さが、アーラヤ識なしには成り立たない」（六四頁）というところである。出世間、つまり世俗的平均的な人間の世界を超え、一切の不安や苦しみやトラブルを超えてしまった清浄な生き方は可能であり、それが可能になるためには、まず他の人に教えを聞くことが起こらなければならない。覚りの種はアーラヤ識の中にはもともと備わってはない。しかし、覚った人

から覚りの教えを聞く。聞いたことを、外れないように、誤解しないように、自分で正しく考えなおす。この二つのことをきちんとやると、正しいものの見方が生まれるのだ、と。

私たちが、「人間は覚れる」とか「覚りとはこういうことだ」とか「こういう修行をすればいい」と聞く。そして、意識でわかる。ところが、眠ると耳も意識も働かない。いったん消えてしまう。だから、聞いたことが残っていくのは、意識や耳にはありえない。

しかし、ある時、「ああ、そういえば、人間には別の生き方とか、もつと別の境地があるんだ」といったことを思い出すこともある。心が散乱し、せっかく聞いた覚りの話が中断されることも多いが、あるときふと、「こんな生き方でいいのか」と思い、「覚りということがあった」と思い出すこともある。

つまり、聞いたこと、考えたことは、実際私たちの中に残っている。残っている以上、残っている場所があると推測するほかない。熏習が成り立つには、目でも耳でも意識でもない別のところに、熏習される場所が必要である。その場所に向かって、覚りの香りを薫らせていく、覚りの種子を蓄えていくことがなければ、人間は覚りようがない。しかし、そういう場所はあるのであり、種子を蓄えていけば、覚れるのだ。

覚りの種になる教えを聞いても、耳が覚えているわけではないし、意識が覚えているわけではない。にもかかわらず、それが熏習され、保存され、やがて芽生えるのはなぜか。

この出世間の心、つまり平均的な世俗的な状態を超えた覚りの心は、ふつうの人間にとってはいまだかつて修行されたこともないものである。聞いたことさえないかもしれない。いまだかつて聞いたこともなく修行したこともないようなものは、熏習されることもありえない。ここでアサンガは、自問自答する。

もし、悪習がないとすると、この出世間の心はどういう原因から発生するのか。これに答えるべきである。もっとも清浄な真理の世界（法界）から流れ出てくる「真理を」正しく聞くことによる悪習を種子とするので、出世間の心が発生することができるのである。（六五頁）

短い個所だが、私に言わせるとこれは大変なエッセンスである。アサンガは、自分に対する論敵を想定し、その論難にどう答えるか、というかたちで文章を書いている。「もし、アーラヤ識が、もともと煩惱やカルマや生の汚染を生み出すような性格のもので、それが人間が生きていることの根元にあるとすると、どうしたら人間はそれを超えられるのか。確かに少しくらい善の心は起こったりもするが、すぐ消えていってしまう程度のもので、覚りについて修行したこともなければ、聞いたこともないとすると、いったいどうやって人間は覚ることができるのか。おまえのようなことを言うと、人間には希望がないではないか」という論難を想定し、それに対して、「そうではない。実は人間には希望がある。その希望の根拠を、一言で答えるところということになる。もっとも清浄な真理の世界は法界から流れ出してくる真理の言葉を、正しく聞くことによる悪習、それが種子となることによって出世間の心が発生することができるのだ」と答えている。

確かに人間は、生まれついてただ平均的な世界の中で平均的に育てられただけでは覚れない。覚りについて教えてくれる人に会うしかないのだ。その覚りを自ら体現した人が知っているもっとも清浄な真理の世界、そこから流れ出てくる真理の言葉を、正しく聞く、そしてそれが自分のアーラヤ識に染み付く、そこに覚りの種子がたくさん蓄えられると、やがてそこから出世間の心が芽生えてくる。

つまり、人間の心の非常に奥深い世界は、そのままでは様々なトラブルを起こすようなものでしかない、

非常に否定的な大変な問題のあるところなのだが、なおかつそこに真理の言葉が語られ、熏習されていくことによって、人間は覚れるのだという。アーラヤ識を抱えているということは、人間がきわめて悲惨な事柄を起こす原因であると同時に、そこに覚りの種を蓄えられるならば——ならば、である——人間が覚れることの根拠でもあるという。これは、安っぽいヒューマニズムをまったく超えた、一步誤ると恐ろしく悲観的になりかねない人間観だが、それが最後の最後のところで、「だが、だからこそ人間は覚れる」と大逆転の結論に至っているのだ。

さて次に、アサンガはまた興味深い問題設定をする。聞くことによって得る智慧の熏習は、煩惱を生み出す元のアーラヤ識と同性質なのか、そうではないのか。そして、答えて、究極の覚りに至る前までのアーラヤ識の状態を譬えると、水と牛乳が混じり合っているような状態なのだ、という。真理の言葉を聞くことによって得られていく熏習というものは、決してアーラヤ識そのものではないが、アーラヤ識に一緒に蓄えられている。

すると、ただ迷いの種子だけでできているのではなく、覚りの種子も含んだアーラヤ識が、輪廻して次の命を引き起こすことになる。この生で覚りを求めて真剣に生きると、その覚りの種子が「生命の」持続を引き起こす（六六頁）というのだが、これは感動的な言葉だ。無明による生ではなく、覚りの種子からの誕生がありうるというのだ。

比喩的に言うると、もしかすると、読者が唯識に出会えたのは、前世でかなりの修行をして覚りの種子を蓄えてから今生に生まれてきたからなのかもしれない。また比喩的な言い方ではなくふつうの言い方をしても、例えば自分の父や母がどう生きたかが小さい時に自分の心に熏習されるということは確かにある。先生や先輩がどう生きたかという手本も熏習されていく。そういうふうに、ほかの人が生きたことの結果

が私たちという個体の中に熏習され、持続されて、私たちが今唯識を学んでみようという意欲を起こさせているのかもしれない。ものごとを浅く考えたと、たいていのことについて「自分がやりたいと思っただら、こう思っているんだ」と考へるだろうが、やりたいという気持ちそのものにも、それを起こさせてくれた御縁が山ほどあるのだ。何よりもまず、学ぶ当のものを伝えてくれた御縁がある。

「この世界に生まれさせて、諸仏、諸菩薩に出会うこと、従うことを可能にする」(六六頁)と言われている。私たち現代の個人主義的な人間、特に戦後の私たち、さらに後の世代はますます、「従う」などという言葉を聞いたとたんに従いたくないと思うかもしれないが、真理の種子は自分の中にもともとあるものではなく、やはり聞くしかない。忠実に聞く、聞き従うということがなければ、本当には聞けないのだという。要するに、通俗的な仏教語でいえば「前世の功德」が、今生で仏・菩薩のいるところに生まれさせてくれ、それから出会わせてくれ、従わせてくれる。そして、仏・菩薩に出会った時、チャンス逃さないで、できるだけたくさん聞いて、熏習していく。それが覚りの原因になっていく。もちろんアーラヤ識があることが覚りの根拠であるが、とはいっても覚りの種子はもともとそこにはない。そこに仏・菩薩から語られたことを聞くことよって、覚りの種子が溜まっていく。

この世・世間で、覚った人が私たちに聞かせてくれる言葉は、確かに世間の言葉ではあるが、同時にある意味で世間を超えている。そういったものが熏習の段階によって下・中・上と、貯金のように増えていくのだという。わずかな貯金だと利子の額は小さいが、貯金が増えたと利子も大きくなる。だから、持ったら増やす、増やしたらもっと増やすと続ければ、アーラヤ識の中で、迷いの種子に対して覚りの種子のほうが多数を占めるようになり、やがて迷いの種子が全部なくなってしまうところまでいくことができる。

「ハンサ」というガチョウに似た霊鳥がいて、その鳥は水に混じった牛乳だけを飲み分けていくことが

できるといふ伝説があるのだが、譬えて言ふとハンサが水から牛乳を飲み分けていくようなことが心の奥底で起ころのだという。

そういうことの起ころ「心の奥底」を想定しなければ、覚りがあるという事実が説明できない。ところが、現に釈尊やその他の覚つた人がいる。だから、人間の心の中には覚りを可能にする深い世界があると、言う他ない。この深い世界が人間の煩惱の根拠でもあると同時に覚りうるという事の根拠でもある。

私は、ここまで学んだとき、人間がなぜ悲惨で残酷な世界を作り出してきたのかということ、にもかかわらず人間には覚る可能性があると、とてもよく納得できた。そしてそうだとすると、後は、私たちには、熏習すれば覚れる、熏習しなければ覚れないという、単純明快な道筋があるだけだ。すると次は、自分が今生、与えられた人生の長さでどのくらい覚りの種子を蓄え、どのレベルの覚りにまで行けるかという課題が残されることになるだろう。

⑥ 道理による証明

最後は道理による証明といって、禪定体験に基づいた理論的な証明である。深い禪定状態に入ると、イメージや想念や感情といったものが一切現われなくなる。想念はまったくないが、しかもありありと目覚めているという意識状態である。そういう状態では、いわゆる五感も意識も働かなくなっているが、もちろん気絶しているわけでも死んでいるわけでもない。その間、身体を維持しているもの、禪定が終わったら再び意識と五官を働き出させるもの、それを想定しなければ、道理・理屈が通らないということである。

説明概念としての〈アーラヤ識〉

つまり、きわめて臨床的な修行の実践体験の事実に基づいて、こういう現象がある以上、こういう概念を立てないと理論的に説明できないというかたちで出てきたのが〈アーラヤ識〉の概念なのである。だから、〈アーラヤ識〉といっても、それが実体としてあるかないかを問題にする必要はない。それを想定しないと、生まれてきたことの説明もつかないし、人生に悩み・トラブルがあつたりすることの説明もつかない。そして、人間は善なる心を起こすこともたまにあるし、ある人を見ると、もしかすると人間はやはり覚れるのかもしれない。そういうことが、六識だけでは説明できない、アーラヤ識を想定すると説明できる、ということなのだ。〈アーラヤ識〉は、実体概念ではなく、説明概念だと理解したほうがいい、と私は考えている。

三 アーラヤ識の種別

第一章の最後では、アーラヤ識の種別について述べられている。アーラヤ識といっても、実は単純に一種類ではなくて、性質あるいは側面によって三種類、あるいは四種類に分類されるという。

①三種類の第一は言葉によるものである。人間は、言葉を使い、言葉を心の奥底に蓄えることによって生きている。唯識では、言葉が自我の実体視を生み出し、執着を生み出すという。アーラヤ識には「一種

の言語によって蓄えられた、ものを実体視するものの見方のシステム」といった性格があることを、唯識は現代のソシュールなどの言語哲学よりはるか以前に見抜いていたと言っている。いいだろう。

②さらにその結果として生まれてきた、世界や他者から切り離されて、誰の世話にもならず、自分だけが存在しているという意味の「我」、それが存在するという「我見」がアーラヤ識の中にある。

③それから、十二縁起の悪循環を生み出す元になるアーラヤ識がある。

そういう言説、我見、十二縁起的なのが、心の底に、アーラヤ識としてある。この三つはアーラヤ識として一体化しているのだが、場合によってはどれかがなくなったり、どれかが残っていることもある、と考えられている。

(1)四種類の第一は、先にも述べた現世が終わったときに来世を引き起こすような意味での生命情報的なアーラヤ識である。

(2)それから、それが生命として現われる時、人間、阿修羅、餓鬼、畜生、天という六つの生存形態があるのだが、前世での憎しみや殺意や実際の殺人といったカルマがアーラヤ識に溜まっていくと、それぞれの罪に見合った地獄に生命を受ける。前世でかなりいいことをすると、例えば天に生まれ、ある程度は楽ばかりの生存形態になったりする、というふうに成熟していく。そういう生存形態の違いを生み出すアーラヤ識がある。

(3)アーラヤ識は、ある意味ですつと持続している。そのずつと持続しているのをこちらで意識(あるいはヴァスバンドゥではマナ識)が見ている。その時、アーラヤ識が持続して働いているために、それを実体としての私と取り違える。そうした根本的な錯覚の元になるアーラヤ識である。

(4)最後、この洞察がまたとても興味深いのだが、アーラヤ識にはすべての人に共通の部分と各個人固有

の部分があると考えられている。

例えば、私と読者は別人である。ところが、みなさんは、おそらくここに本があるという思いを私と共通に持っているだろう。例えば、ここは日本だとか地球だといったことを共通に思い描いている。つまり、共有している世界がある。それはなぜなのかよくわからないのに、きちんとそう思っているわけだ。私は人間だとか、ここは人間界だとか思っている。そうした世界像や自我像は、あなたも私もみんなが共通に持っているけれども、サルとは共有していないし、ゴキブリとも共有していないようだ。人間の可能な範囲での世界像を人間同士は全部共通して持っている。なぜかわからないが、心の深いところで、「世界」というものを共通に想定する。そういう「世界」を唯識では、人間および生きとし生けるものをすべて入れている器うつかのような場所という意味で「器世間」と呼ぶ。そういう器世間の種子は共通にみながつ持っている。そして、「我」という思いの種子はそれぞれがつ持っている。

つまり、アーラヤ識といっても、共通の相と共通でない相、万人が共有して持っているアーラヤ識の世界とその人だけが持っているアーラヤ識の世界との違いがあるという（この洞察は、ユング心理学の「集合的無意識」の概念と重なるところがあって、きわめて興味深いが、頁数の関係で本書では深入りしない。関心のある方は拙著「唯識のすすめ——仏教の深層心理学入門」NHKライブラリーの当該章を参照されたい）。

アーラヤ識の程度と中立性

第一章の最後に述べられている、補足的だが重要なことをあと二点、紹介しておこう。

まず一つは、同じアーラヤ識といっても、どうにもならない荒くて重い状態のアーラヤ識とかなり軽やかで繊細になったアーラヤ識、それから小さな覚りの始まりが起きているアーラヤ識、さらに覚りの直

前のところまで来たアーラヤ識といった、程度の差はやはりあると言っていることである。つまり、アーラヤ識だからすべて悪だと見てはいないのだ。これは、唯識と欧米の発達心理学や深層心理学との統合を考える上で、非常に適切な見方である。

もう一つは、アーラヤ識は、煩惱に覆いつくされているわけではなく（無覆）、善悪について中性・中立的（無記）だとしている点である。「この中性であるということは、善と悪の二つの存在と同時に発生することと矛盾しない。善と悪の二つの存在は相互に矛盾する。もし果報が善か悪の性質になるのならば、適切な手段によって煩惱を解脱しようということはないだろう。また手段として善や煩惱を起こしうるということもないだろう。したがって、解脱も束縛もないだろう。この二つのことがないので、それゆえに果報識（かほうし）（＝アーラヤ識）はまぎれもなく無覆無記性である」（七四頁）という。

原漢文に引っぱりられて拙訳はやや生硬な文章になってしまったが、要するにこういうことだ。前世の結果（果報）である現世の人間の心の底が、ひたすら善か悪かのどちらかなのなら、逆の悪も善も発生しやうがない。すると、結果としての束縛も解脱もありえない。しかし、事実、この世には束縛も解脱もあるのだから、その二つのことがどちらも起こりうる基盤としてのアーラヤ識そのものは中性だと考えるべきだ、というのである。

これは先にも述べたが、性善説と性悪説それぞれの見ている妥当な部分を含んで超える、きわめて的確で深い人間理解だと思う。

まとめ

以上、大乘仏教の求道者・菩薩がまず知っておくべきこと、あるいは覚りと迷いが発生する根拠として

の〈ヘアラヤ識〉について、「撰大乘論」の重要なポイントはほぼ述べることができた。用語や叙述の古めかしく難解な印象を拭うと、そこには、現代人にとっても有効・妥当な、さらに言えば決定的に重要な人間洞察が語られているのである。以下統いて「撰大乘論」の叙述の展開を追っていききたい。

第三章 世界を見る角度 へ三性へとは何か

一 世界の見方の三つの相

「攝大乘論」第二章は、「知られるべきものの勝れた相」である。ここでは、覺りたいと思つて大乘仏教を学び始めた人間、菩薩が「知つておくべき」肝心なことに關する大乘特有の「勝れた相」が解明される。その、菩薩が知つておくべきこととは、迷いの目に見える相（分別性相）、覺りの目に見える相（眞実性相）、双方に共通する相（依他性相）という、世界・存在の見方Ⅱ見え方の三つの相である。世界の見え方の三つの性質に關する説という意味で、〈三性説〉と呼ばれている。これは、大乘仏教の教學の發展の中で、それ以前にはなかつた、唯識学派獨特の勝れた洞察である。

仏教思想史的には、唯識に先立つ空・中觀の思想では、「一切空」といった言い方がされたため、仏教の内外でしばしば「何も無いのなら、すべてが空しいのか」とか、「すべては無いと言つても、現にあるではないか」といった誤解による批判が出てきた。そこで、「空」という言葉で表現しようとしたことを、さらに論理的に説明しようとしたのが三性説だと言われている。これは確かにそうだろうと思ふのは、私も、三性説を学ぶことによつて、あいまいだった空の理解がはっきりしたような気がしたものである。以